

平成 23 年 1 月 15 日
北関東フォーラム
於：シムックス

中斎塾 北関東フォーラム
平成 23 年 第 1 回講話

大局観とひらめき

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ申し上げます。

今年、私は大局観という言葉で一年間過ごしたいと思っています。大局観の中身が色々ありますが、大きな眼でものを見る・総合的にものを見る、ということが今年は特に必要だと思ひます。それには判断をしなければなりませんから、判断の三原則をぜひ今年に活用して戴きたい。本質的に見るとどうか、大局的に見るとどうか、歴史的に見るとどうか。判断の三原則を意識して日常生活に活かしてゆけば、知らず知らずの間に実行したくなつてきます。実行したくなると、これは自動的に知識・見識・胆識に繋がります。色々な知識が沢山入ってきますから、それらの知識をまとめていると、木内信胤先生の言われる「ひらめき」が生まれて、それが総合的直観力に繋がります。知識がまとまって自分なりの判断力が確立されると、見識になります。見識が更に昇華すると、胆識（実行力の備わった見識）になります。1 年間それらを追い続けてゆきたいと思っています。

良い年にしよう！ と強く思う

今年に入ってから半月経ちました。

半月の間、嘘をつかなかった方？

半月間、良い日が続いたなと思う方？

この半月間、有難うと言ひ・有難うと言われたことが結構あったという方？

年始めですから、一年間分のものをお聞きします。

今年 1 年間は嘘をつかない。嘘をつくような考え方・仕事・人間関係、そういう嘘との縁を切りたいと思ひている人？

今年が良い年にしたい、良い年にしようと思ひている人？

皆さん手が挙がりました。良い年にしよう、良い年にしたいと思ひていればいるほ

ど、願いが強烈であればあるほど良い年になります。強烈に思い続けると念ずるという言葉に変わって、だんだん手を合わせるようになる。思いは念に変わり、祈りに変わる。そうなると大したものです。良い年にしようと毎日毎日強く思っていれば、悪い方を択ばないで良い方を択びます。生半可な気持ちだと心が弱いから、迷って弱い方を取ってしまう。今年色々なご馳走が目の前に出てきても、全部取らないで、ほどほどで過ごしていけばまず心配はない。大所・大局観を身につけて、欲に打ち克つていこうとすれば、きっと良い年になります。

今年積極的に有難うと言ひ、有難うと言われるような環境を作ろうと思っている人？

こうやってお聞きして皆さんが手を挙げる。そうすると心の中に少し残ります。手を挙げるとか口に出すという動作をすると心に残りますから、何か判断をしなければならぬ時にちょっと思い出します。自分で何か意思表示をするということは、後々響きますから非常に良いことだと思います。

今、お話しているのは基本哲学の知足です。知足はほどほどです。これくらいで我慢をしておこうという心持ちが非常に大事です。知足の心が身体に染み込むと、非常に良い人生になります。周りの方にもそれが自然と影響を与えるようになります。その信念をしっかりと持ち戴くとよろしい。

今日の論語

本日の論語は述而第七 10～16 です。先ほど非常に気持ちの良い素読をして戴きました。では、解説を致します。

【十】 し がんえん い いわ これもち すなわ おこな これ お すなわ かく
子 顔淵に謂いて曰く、之を用うれば 則ち行い、之を舍けば 則ち蔵す。
ただ われ なんじ こ あ しるいわ し さんぐん や すなわ たれ とも
唯 我と 爾とのみ是れ有るかなと。子路曰く、子 三軍を行らば、則ち誰と与にせ
しいわ ぼうこひょうが し くいな もの われ とも かなら こと のぞ
んと。子曰く、暴虎 馮河、死して悔無き者は、吾 与にせざるなり。必ずや事に臨
おそ はかりごと この な もの
みて懼れ、 謀 を好みて成さん者なりと。

孔子が顔淵に言いました。

「私を使う君主がいれば直ぐに仕えようではないか。しかし君主が私を見放して用いないようであれば、直ぐに隠遁する。そういうことが出来るのは、私とお前くらいかな」

孔子は顔淵をよほど期待しているのでしょうか。それを側で子路が聞いていて、私はどうなのかと思いつつ、

「孔先生が三軍を指揮する時には、誰と一緒に行動しますか」と聞きました。

一軍は 12500 人で、大きな国には必ず三軍があります。子路は当然自分を選ぶだろうと思って孔子に聞いたわけです。

孔子が答えました。

「お前のように、素手で虎を撃ったり舟なしで河を渡ろうとして、死んでも後悔しないような者とは一緒に行動は出来ない。事にあたっては慎重に、成功するように計画を立ててきっちり実行する者と一緒に行動したい。はなから失敗するのが分かっている者と一緒に行動はしない」

子路のように向こう見ずに行動してしまって、成功するか失敗するかは運次第というのは駄目だと言っています。ちなみに子路はこう評されているような人物ですから、当然、畳の上ではなく戦場で斬られて死にました。しかし孔子が子路を非常に気に入って愛していたということは、こんなエピソードで分かります。子路が殺された時に、子路の勇氣をもらいたいということで膾炙りにされて塩辛にされ、仲間に食べられたのです。それを聞いた孔子は酷く悲しんで、家にあった塩辛の甕を割ったという話が残っています。

論語を自分なりに読んだら、それを現代に活かしたらどうなるか、自分に置き換えたらどうなるかと考えないと面白味が出てきません。

今、ちょうど菅さんの改造内閣が行われたところですから、それに置き換えてみましょう。「之を用うれば則ち行い」の部分は、与謝野さんです。民主党は亡国の政党だと盛んに主張していた人が、経済財政政策担当大臣になる。自分も 70 歳過ぎたから、菅さんに呼ばれば仕えて自分の思っていることを実行したい、という気持ちは何となく想像出来ます。しかし「之を舍けば則ち蔵す」で、菅さんが見捨てたとしても、与謝野さんは議員辞職はしないでしょう。

なかなか政治家の出处進退は難しいと思います。木内信胤先生は、「人間が動く時は感情で動く。公明正大なきちんとした理屈などは、皆、後からつけるものだ」と言っておられました。参議院議長を務めた江田五月さんが、法務大臣をやらないかと言われ、何と返事をしたかは知りませんが、結果的に法務大臣に就任した。色々な批判はあるだろうけれども崖っぷちに立っている年来の盟友を助けたいという発言は、後からつけた理屈でしょう。藤井さんの屁理屈も聞いてみたいと思います。この方はご自分で体調不良で辞めたにもかかわらず官房副長官になるというのですから、大義名分をどう説明するのでしょうか。枝野官房長官にしても、選挙であれだけ惨敗した責任者がなぜ又出てくるのでしょうか。屁理屈を大分言っていました、反省の念は全くありません。やはりおかしいと思います。

後ほど申しますが、私は新聞を読む時に、今年は、三つ意識して見たいと思っています。一つは民主党の動きです。民主党がどれだけ酷い手を打つか。それによって日本の国が坂道を転げ落ちていくわけですから、民主党の動きをよく見ておきたいと思っています。今申し上げた、与謝野さん・江田さん・藤井さん・枝野さんがどういう屁理屈をつけるのか、楽しみに見たいと思っています。

二つ目は、日本の国債がどう動いていくかをよく見ておきたい。

三つ目は、自然災害がどれだけ起きるか、その予兆がどれだけあるかを見ておきたいと思っています。

【十一】 しいわ子曰く、とみ富にしてもと求むべ可くんば、しつべん執鞭の士とし雖も、いへど吾亦われ之をまた為さん。これ如し
もと求むべからずんば、わ吾がこの好むところ所にしたが従わん。

孔子が言うには、正しい方法で富を得ようとするのは良いことである。御者であっても、正しい方法で富が得られるならば、当然、私もなるであろう。正しい道で選べないならば、自分の好みにまかせて仕事をするのであろう。

孔子がそうするならということで、渋沢栄一さんも踏襲しています。

翻って、自分が利益を得ている人は、それが正しい方法かどうか考えてみるとよろしい。世の中の為になる正しい方法で仕事をしているのであれば、胸を張ってどんどんすべきですが、後ろめたいやり方をしていると思ったなら、そのうち転落が始まると思えばよいでしょう。

【十二】 し子のつつし慎むところ所は、さい斉せん戦しつ疾なり。

孔子が慎んだところは、斉（ものいみ）と戦（いくさ）と疾（病気）である。

斉・・・国家的な行事で重要な祭祀の時には、身を清めて厳重に実行する。

戦・・・戦をする時には、十分に準備をして勝てる戦をする。

疾・・・病に陥らないように気をつけることです。ちなみに孔子は、少しでも腐ったようなものは口にしないなど、食べ物や衛生面に相当気を遣っていました。

皆さんも自分自身に置き換えて、自分は何を気にかけているか、注意すべきところは何

か、胸に手を当てて考えるとよろしいですね。

私が氣にかけているのは出处進退です。自分が世の中に出ていて、出るべきところ・退くべきところを間違えないような判断をきちんとしたいと思っています。世の中に出る時は仲間が沢山集まって応援をしてくれて、押されて出て行くことはよくあります。但し、退く時というのは、誰も「あなたは少しボケてきたから辞めた方がいい」などとは言いませんね。自分で自分の身体はよく見ておかなければいけません。会社の社長や会長であれば特に、周りの人は、「そろそろでは・・・」とは言ってくれませんかから、自分で判断しなければいけない。出处進退の判断を間違えないように、私はいつも氣にかけています。

その他に私が氣にかけているのは、睡眠と健康です。睡眠不足だと判断を間違えます。ですから私は睡眠だけはきちんととるようにしています。そして健康を維持するために、野菜中心の生活と毎日1万5千歩歩くと決めて実行しています。

【十三】 し せい あ しょう き さんげつ にく あじ し いわ はか がく
子 齊に在りて 韶を聞くこと三月。肉の味を知らず。曰く、な ここ いた 図らざりき、がく 楽を
為すの斯に至らんとは。

韶とは、聖人の舜が作曲したと伝えられる音楽です。

孔子が齊の国にいた時、韶を聞いて感動し、食べている肉の味が分からなくなってしまった。思いもかけなかった。音楽がここまでのレベルに到達するとは何と素晴らしいことだろうか・・・と言って歎息した。

残念ながら私は音楽を聞いて感動し、3ヶ月間も食べ物の味が分からないなどという経験がありません。そこまで孔子が評価をするというのは、孔子の音楽・文化に対する入れ込み方が凄いと感ずります。

【十四】 ぜんゆういわ ふうし えい きみ たす し こういわ だく われ まさ これ と
再有曰く、夫子は衛の君を為けんかと。子貢曰く、諾、吾 将に之を問わんとすと。い いわ はくい しゅくせい なんびと いわ いにしえ けんじん いわ
うら 怨みたるかと。曰く、じん もと じん え またなん うら 古の賢人なりと。曰く、い いわ ふうし
仁を求めて仁を得たり。又何ぞ怨みんと。出でて曰く、たす 夫子は為げざるなりと。

衛という国に孔子一門が滞在している時、衛の国は内乱を起こして親子で争っている状況でした。亡命中の孔子一門が衛の内乱に対して、我々はどう対処すべきかという議論をしたけれども結論が出なかった。

冉有が子貢に、「孔先生は衛の国の君主を助けるのでしょうか」と聞いたので、子貢が「では、私が先生に聞いてくる」と言って、孔子の部屋に入って行きました。そして、「先生は伯夷・叔斉をどう評価しますか」と遠回しに聞きました。

孔子が「昔の賢人だね」と言いました。

伯夷・叔斉は孤竹という国の王の息子で兄弟です。王位をお互いに譲り合って、首陽山に隠遁し、最後は蕨を食べつつ餓死をしたという話は有名です。

更に子貢が「伯夷・叔斉は後悔したのでしょうか」と聞いたので、孔子が、「仁を自分のものにしたいと考えて行動した結果、餓死をしたのだから、これは本物だろう。どうして後悔することがあるのか」と言いました。

それを聞いて子貢が部屋から出てきて、「先生はどちらも助けないだろう」と言いました。

衛の靈公の息子の蒯聵（かいかい）は、淫乱な母親の南子を殺そうとして失敗し、勘当されて晋国に逃げました。靈公が亡き後、南子は蒯聵の息子の輒（ちょう）を王位につけました。そこへ逃げていった蒯聵が王位につこうと戻って来たので、親子で王位争いをしていたわけです。

孔子が輒と蒯聵のどちらを応援するのか、子貢が伯夷・叔斉の故事で遠回しに聞いたのです。孔子の言葉を聞いて、子貢は、孔子はどちらも助けないし、近々衛の国を離れるだろう、というところまで読んだのです。結果として、孔子は陳という国に出て行ったので、子貢の読み通りだったわけです。

子貢という弟子は切れやすいですね。なので、孔子は時々子貢をゴツンとやったのでしょう。周りを見渡しても、あまり切れすぎると人は組織の中で棚上げにされることが多いようです。能ある鷹は爪を隠すと言います。事ある時だけ能力を発揮するというのが、日本人の好む人物像になっていると感じます。

【十五】 しいわ 子曰く、そし 疏食を飯い、くら 水を飲み、みず 水を飲み、の 肱を曲げて之を ひじ 枕とす。ま 楽亦 これ 其の中に まくら 在り。たのしみ 不義にして また 富み且つ そ 貴きは、うち 我に於て あ 浮雲の如し。ふぎ と か たつと われ おい うきぐも ごと

孔子が言うには、粗末なものを食べ、水を飲み、肱を曲げて枕にする。そのような貧困生活と見えても、道に志す本当の楽しみは、おのずとそこにあるのだな。不正な手段で富や地位を得ることは、私にとって浮雲のようにすぐに無くなるものだ。

不正な手段で富や地位を得てはいけないということです。自分自身は不正な手段で富や地

位を得ていないか、反省するとよろしいでしょう。

山田方谷の作った漢詩に「孔顔の楽しみ 其の中に在り」という一文があります。先生は論語の講釈をし終えると、その論語について漢詩を作って吟ずることをしていました。『陽明学のすすめ 山田方谷「擬対策」』の中にも紹介しています。

論語講畢。賦示諸生。	るんご こうお ぶ しょせい しめ 論語の講畢わる。賦して諸生に示す。
不 愠 知 命 是 君 子	いか めい し これ くんし 愠らず命を知る 是 君子
一 部 円 珠 成 始 終	いちぶ えんじゆ しじゅうな 一部 円珠 始終成す
反 覆 読 来 誰 会 得	はんぷくよ きた たれ えとく 反覆読み来りて誰ぞ会得するは
孔 顔 之 楽 在 其 中	こうがん たのしみ そ うち あ 孔顔の 楽 其の中に存り

【訳】人が自分を理解してくれなくとも不平不満をいだかない、いな、人から理解されない人間になることが、むしろ学問する者の使命でもあれば運命でもあると知っている、そういう人間を君子というのだと『論語』は語っている。

『論語』全篇は、円い一つの珠のように、その首章と尾章がぴったりと深いつながりを以て結ばれている。そして学問をする者の理想と運命とが述べられている。

この書物をくりかえし読んで、その深い意味を理解している者にだれがいるのだろうか。

孔子と顔回との楽しみは、この愠らず命を知り、君子となることにあったのである。

(『陽明学のすすめ 山田方谷「擬対策」』深澤賢治著 明德出版社)

【十六】 子曰く、我に数年を加え、五十にして以て易を学ばしめば、以て大過無かるべし。

学者によって解説の分かれるところです。

この文章通りに考えて、後何年かで50歳になる頃に易経を学べば、人生大きな過ちをしないようになるだろう、という解説があります。一方、孔子はこの頃七十歳に近いので、五十を「朏」の文字の間違いだとする学説もあります。

安岡先生は、あまり気にしないで50になったら易学を学ぶと良いのではないかと、という言い方をしていますから、素直にこの文章を読めば良いと思います。

『國の個性』にみる総合的直観力

今日、皆様にご紹介する本は、木内信胤先生の書かれた『國の個性』です。アメリカも日本も、「國の個性」に生きよう、世界の国々もみな というサブタイトルが付いています。私はこの本の目次が特に好きです。目次を見ると、どうやってこの本ができたかが分かるし、木内信胤先生の人間性が伝わってきます。ご本人も目次を書くのが大好きで、「目次を書けばあとは大体出来たようなものだ」と言っておられました。

木内信胤先生は中斎塾フォーラムの顧問である木内孝さんのお父様です。私は以前、信胤先生に「死ぬ時の心構えはお持ちですか」とお聞きしたことがあります。先生は、「君、そんなことを聞くものではないよ。私は死ぬ時は見事に死んでみせるから」と言われました。実際、家庭でもそう言っておられたそうです。ご自分は 94 歳で死ぬと言われていて、実際に 94 歳で亡くなったのですが、予定表には今後の予定がびっしり書いてあったので、おそらくまだ色々なことをされるつもりだったのでしょう。

この本の中で木内信胤先生は、アメリカが危ないと気がついたのは昭和 58 年の暮れだと書いています。何故そう思うのか、それをずっと深く考えていって、アメリカの人と日本人との根本的な違いに気がついたわけです。その内容を申します。

アメリカは近代西洋文明の盟主です。西洋文明は行き着く所まで行き着いて、あとは衰えるだけ。次の文明にバトンタッチする状況に来ている。近代西洋文明が終焉を迎える最後の足掻きが、アメリカの今の状況になって出てきている。近代西洋文明のベースは法律です。ユダヤ民族と神との契約によって近代西洋文明は成立をしている。アメリカが契約社会・法律万能主義になっているのは、その文明の誕生した経緯から考えると当たり前のことなのです。法律とか規制が前面に出て、道徳的なものとか風俗習慣といった人間の心の中にある自律、人間の内面に兆す精神的な規範がどんどん欠けてきたところに、アメリカの病根がある。

日本は、何が何だか分からないけれどもそう思う、訳は言えないけれどもそういう行動を日本人全体がとっている。日本国には神道がベースにあるから、そういうものの考え方が出来る。ユダヤ民族と神との契約からスタートしたものは根本的に成立過程が違うから、日本は良くなっていくけれどもアメリカは駄目になる。

学問に関してみれば、アメリカは分析一辺倒である。分析は最後に総合的なまとめがあって初めて学問として成立するのに、アメリカはまとめるといふ学問ではなくなりました。そういう精神構造を持った国はこれからは駄目になる。

アメリカはもう国家ではなくなって、個人の集合体である。そうなると、国家として壊れるしかない。

・・・という「ひらめき」、総合的な悟りを得たと木内先生は書いています。アメリカは何故これから落ちてゆくのか、その理由は何なのか、日本はどうすれば良いのか・・・そのことをどうしても書きたくなって書いたのがこの本です。アメリカがこれから驚くほどの勢いで転落し、それに引きずられて世界は皆悪くなって、近代西洋文明は終焉を迎えるであろうという予測を、木内先生はこの本の中で明確に書いています。

この本を読み直して感じたことは、今の日本そのままです。日本はアメリカの後を追いかけています。風俗はどんどん悪くなりました。倫理も道徳もだめになりました。人間の内面を規制する、内面をレベルアップさせるような社会では、日本はもうなくなってきたと感じます。

先日、木内孝さんとお話しました。もう数年前から、平成 23 年は日本がどんどん駄目になっていく年だという話を木内さんとしていたのですが、木内さん曰く、「いよいよその年になったねえ。どんどん落ちて行って、どこが底だと思う」と聞くので、私は「底が見えない」と答えました。木内さんも色々な先生方に聞いても、やはりどこまで落ちるか分からない国になってしまったということで意見が一致しました。

日本は今、坂道を転げ落ちている。今年はそういう自覚を国民が持つ年である。どこまで転げ落ちるかは、今年は分かりません。来年も間違いなくそのままずっと落ちて行きます。落ちながら乱高下して、再来年は上がりつつあると思っていますが、全体的な基調は落ちる一方です。

信胤先生流に言えば、この国は壊れるしかない。そこまで来ています。自分の子供や孫がどういう目に遭うか、それはよく分かりませんが、木内孝さんが世界的な学者の方々にインタビューして自分なりの見解を出されたのは、「これから 100 年後、人類が生存しているかどうかは 50% の確率である」ということです。そこまで断言してよいかどうかは私には分かりませんが、日本という国で考えてみると、これ以上悪くなりようがないという底が見えない。だからもう落ちる一方であるという点が、木内孝さんと意見が一致しています。木内孝さんは、<これからの人は自然を師匠としましょう・自然に学んでいきましょう・大地の恵みを活かそうではないか> という大きな取組みを、3 年前から始めています。佐藤一斎先生も『言志録』の中で、「太上は天を師とし」と言っています。

この本の中で、木内信胤先生の人生観が出ていて面白いと思ったのは、今の世の中は平等が良いという風潮になっているが、それはおかしい。世の中は不平等が当たり前で、不平等だからこそ面白い。平等・平等と声高に言う世の中が間違っている。世は不平等であ

るとはっきり自覚するところから人間はスタートするのだ、とっておられます。

木内信胤先生の総合的直観力について、もう少し申します。世の中を見ていると、どうもおかしい。何とかして自分の疑問を知りたい、知りたい・・・身をこがすように強烈に知りたいという気持ちが持続して熱が高まると、或る日突然、はっと分かるというのです。天下の形勢は、<一葉落ちて天下を知る>、これが悟りだと木内信胤先生は言われています。葉っぱが一枚ひらひらと落ちてくるのを見て、誰でも悟れるわけではありませんが・・・。何とかして知りたい、分かりたいと痛切に思い続けていると、何かのきっかけでふっと分かる。これが日本人だね。理屈を積み上げて分かるのではない。何かのきっかけでふっとひらめいて、それで大きな悟りに繋がるとも言っています。

但し、木内先生は、何故アメリカがおかしくなったのかということについて、それらを検証する論文を様々な分野の専門家に書いてもらい、最後のまとめを先生ご自身でされています。色々な学者の人たちを集めてディスカッションした結果生まれたもので、決して一人の頭の中からだけで生まれた悟りではないのです。ですからこの本は、色々な学者の智慧が結集されて、アメリカが転落していくということが学問的に書かれています。

木内先生はそういった情報を新聞からとっておられました。毎日 5 紙くらいを赤ペンで引いて、これはと思うものを丁寧に読み直しされていました。そして、分からないことは専門家にすぐに聞いておられました。情報は出てしまうと古くなります。生きた情報というのは、フェイス・トゥ・フェイスだとおっしゃっていました。一対一で話しをして、そこから聞いたものが生の情報であって、それをどう活かすかが大切なのです。

以前、何かで読みましたが、孫正義さんが高校生の時にマクドナルドの藤田社長に会いたいと思って、1 週間通いつめてようやく 30 分だけ会ってもらえたのだそうです。孫さんはその時の出会いが人生の転機になったのだそうです。

新聞や本に書いてあるものを読んだだけではインパクトを受けません。ところが生の人格に触れて聞いた話は、強烈に印象付けられるものだと感じます。やはり情報は生きたものでなければいけません。しかも何人が伝わっているうちに、真の情報は消えてしまいます。木内先生はご自分で情報の仕分けをされたのだと思いました。

いつ日本は坂を転げ落ちるか 新聞の読み方

私は、<今年、日本は坂道を転げ落ちる年だ>というテーマを決めていますので、その視点で新聞を読みます。坂道を転げ落ちる予兆を新聞から汲み取ろうと思っていますの

で、先ほど申し上げたように、氣をつけて見るのは三つです。

一つは、民主党がどれだけ無様な手を打つのか。民主党の打つ手は悉く裏目に出て、日本を悪い方向に追いやっていくと思っています。今回の内閣改造人事によって党内の内紛は更に広がるでしょうし、野党も攻撃を強めるでしょう。当然、解散総選挙に向って動いていると感じます。菅総理がじたばたして解散総選挙はしないと断言していますので、それまで色々な懸案を引っ張り続けていたら、日本の国はどんどん悪くなっていく。与謝野さんを入閣させて、消費税を上げることは見え透いていますが、消費税の抜本的な税制論議をしていません。根本的なものを何もしないで、目の前の小手先の対処療法ばかりをやっている。もっとも民主党は抜本的な論議が出来るような体質の党ではないし、人材もいないと見えます。かといって残念ながら、自民党や他の党にもいません。

今朝の新聞を読んでも、「危機」という言葉が踊っていますが、政治が危機だとは一行も書いてない。今回の内閣の改造にともなって、経済危機や農業危機をクリアしなければいけないという論調が沢山ありますが、政治に携わる人間がまず何をすべきかという論調は全然ありません。政治家は、自分たちは棚上げして世の中の景気や危機について語っていますが、自分自身のことについては一切反省していない。それが今の日本の最大の問題ではないかと感じます。政治家が襟を正せば良くなるだろうという論調もたまにはありますが、日本の国が壊れる方向に向うのを民主党が一所懸命進めているわけですから、良くなるわけがない。ということで、意識して民主党の動きを見ようと思っています。

二つ目は国債です。日本の民間銀行が持っている国債は、2008年9月末時点で83兆円です。それが2010年の9月末には143兆円まで膨れ上がっています。2年間で1.7倍になっているという記事が新聞に小さくありました。言い方を変えると、日本の銀行は他に方法がないから、紙くずを抱えざるを得なくて抱えている。民間が持っている資産のうち約四分の一が国債で運用されているということですから、国債が暴落したらどうなるのでしょうか。国債が駄目になったら、含み損が出て銀行はお金のやり繰りが出来なくなりません。

三つ目が自然災害です。特に鳥インフルエンザ、伝染病がどうなるか気になります。又、地震・津波・大火事・山崩れといった自然災害が、日本人が弱っている時に襲ってくると思います。そうすると連鎖反応で大きな災害が起きると思っています。

新聞はやはり2紙は読んだ方が良いと思います。リアルなものはネットですから、これも見ておく必要がある。新聞の中でぼやかして書いてあるものはあまり気にしない。大きい見出しの記事と小さな見落とすような記事、この二つを意識して、見られると良いと思

います。出来ればテーマを2つ3つもって、それに関する記事は1年間追いかけると良い。

私は民主党と国債と自然災害を追いかけます。日本の国が坂道を転げ落ちつつあるという認識を私は持っているけれども、どういうところで日本国民がはっと分かるのか、その予兆はどこにあるのか、それだけをずっと追いかけます。すると或る日突然、こういう見方をすればよいのだ！ というひらめきが、1年間の中で何回か生まれると確信しています。

皆さんも是非、疑問を持ったなら途中で投げないで、その疑問を1年間追い続けることをお勧めします。そうすると必ずその中からひらめきが生まれます。総合的直観力によって導かれた結論、理由は分からないが何となくそう思う、これが日本人の歴史的なものの考え方、行動の基本であると思っています。

今日のテーマは大局観と書きました。大局観を得るには、総合的直観力を磨くのが一番良い。そう申し上げて、新年最初のお話にさせて戴きます。有難うございました。